

大阪センチュリー交響楽団の将来ビジョン(案)

府民文化部 都市魅力創造局文化課

はじめに

- 平成元年、大阪センチュリー交響楽団の運営を含め、多彩な芸術・文化事業を実施する主体として財団法人大阪府文化振興財団を設立

文化をもって世界に貢献する「文化首都大阪」の実現をめざし、
府民のニーズに応え、多様で質の高い音楽を提供する管弦楽団を創設

大阪センチュリー交響楽団の評価と課題

認知度

- 大阪では大フィル(86.2%)、関フィル(63.4%)、センチュリー(58.9%)、シンフォニカー(40.5%)の順の認知度 **在阪4オケの中で3番目**

補助金に対する評価

- 補助金の評価は、削減+廃止が57%、維持拡大が26%で、削減の理由としては府の財政的理由が多い

税金投入に対して府民の十分な理解を得られていない

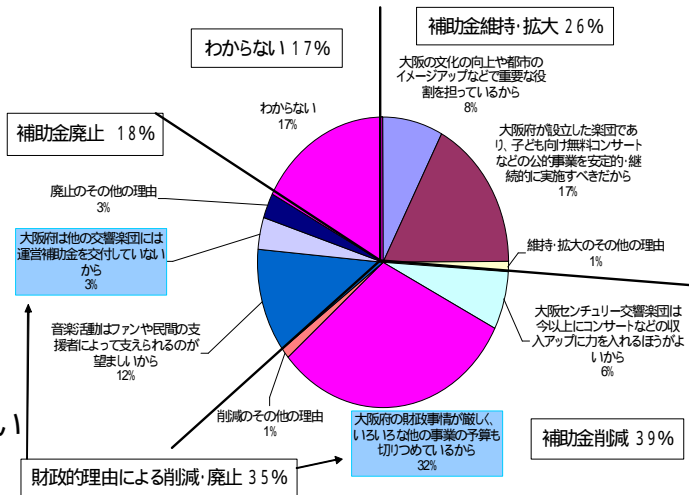
収入確保策の模索

- 府が支える楽団として設立されたため、他のオケに比較して民間支援が圧倒的に少ない
- 収入確保のための戦略が必要**

期待する役割

- 「芸術性の高い、我が国有数の楽団」を目指して20年前に設立し、緻密なアンサンブルには高い評価を得ているが、一般府民ネットアンケートによる補助金維持・拡大を支持する人の65%はその理由として「子ども向け無料コンサートなどの公的事業の安定的・継続的实施」を上げており、かつ、ファンクラブ郵送アンケートによるセンチュリーに期待する役割としては「府民から親しまれる地域密着型のオーケストラ」の構成比が4割程度と最も高い
- 府民ニーズとのギャップ**

- 現在の府民意識とのギャップが認められる
- 府としても、公的支援のあり方について抜本的に精査する必要がある
- 限られた府財政の予算配分について府民の理解を得るためにも新たなあり方ビジョンが必要



公的支援のあり方

- 公的支援の側面から見ると、仙台市や金沢市、山形県や群馬県など、民間の力だけではプロオーケストラの継続的運営が難しい中で地元のオーケストラに対し支援を行い、都市政策・府民文化政策の両面の活用を行っている状況がある

- 一方、大阪においては、既に3つのオーケストラがある中で、当初、「芸術性の高い、我が国有数の楽団」を目指して、センチュリーをスタートさせた経緯がある

- しかし、現在の経済環境、府の財政状況や府民意識を踏まえると、センチュリーについては、府民文化政策の側面に一層軸足を置いたものへと転換を図り、他のオーケストラとは異なった、府民にわかりやすい、府民文化向上に向けた取組みを推進しなければ、公的支援を行うことについて理解を得ることは難しいと考える

大阪府の公的支援の側面からの「あり方検討」

- 楽団の評価や公的支援に対する府民理解を獲得していくためには、当面、現状程度の府補助金のもとで、次世代育成や府民がクラシックをより身近に感じることが必要であると同時に楽団運営における更に厳しい経営改革を求めざるを得ない

財団(センチュリー)の意向

- 今の楽団運営の中でより公的な取組みを増やすにはさらなる公的支援が必要
- 社会貢献だけでなく、芸術性の高いオーケストラとして発展していきたい
- そこへの府の支援が難しいということであれば、**府からの自立を目指す**

- 限られた補助金のもとで、次世代育成や府民がクラシックをより身近に感じることが必要であると同時に楽団運営における更に厳しい経営改革を求めざるを得ない
- 府の補助金に頼らず、民間の支援を得て今まで培ってきた芸術性を保ちセンチュリーが発展していくために、府としても自立化を支援する

オーケストラの政策的位置づけ

都市政策としての活用《都市像の創出》

- 芸術文化の振興は、観光、地域振興、経済活性化の分野へも活用

(具体例)

- オーケストラのレベルアップ(規模拡大、優秀な楽員の継続的な確保、指揮者や客演の充実など)
- 知名度向上のためのPR(海外公演などでの高い評価など) ・芸術性の高い音楽祭などでのオケの活用 等

府民文化政策としての活用《住みやすい魅力あるまちづくり》

- 次世代育成の観点を含め、大阪府民の生活を文化的に豊かにするための一つの有効な手段

(具体例)

- 裾野拡大に資する演奏会の実施(市民ホール等での演奏会など)・病院や福祉の現場などでのミニコンサートの開催
- 親しみやすいプログラムの提供(音楽体験センター、タッチ・ジ・オーケストラなど)
- 学校教育現場などを中心とする音楽専門プログラムの提供 ・若手演奏者の育成 登竜門コンサート 等

府の支援

- 財団(センチュリー)の経営の自立化に向けた取組み期間(スポンサーの獲得等)である22年度については、21年度と同等の府補助金を措置するとともに、オーケストラハウスについても同条件での貸与を行う

- なお、22年夏を目途に自立化について一定の見極めを行った上で、基本財産やオーケストラハウスの取扱い等を含め、具体的な「法人のあり方(自立化)」の内容について検討する

新しい発展を目指して

20周年を迎えての新たな決意

大阪センチュリー交響楽団（以下、当楽団という）は、1989年12月、大阪府民に親しまれ、府民の誇りとなるオーケストラを目指して、大阪府によって設立された。爾来、創成期から今日までの20年の間、当楽団は府民に親しまれる存在となるとともに着実な成長を重ねてきた。そして20周年を迎えた今日、新たな飛躍の年、21年目の活動を展開しようとしている。

他方、当楽団の母体である大阪府は、財政危機の中で、当楽団に対する補助金についても大幅カットを余儀なくされる状況にある。

そのような状況の下で、当楽団は、改めてこれまでの活動を振り返るとともに、新たな発想のもとで新しい発展を目指した活動を行う必要があることを認識し、ここに、新たな活動の方向とわれわれの決意を表明する。

キーワードは、

【大阪力・発信】【感動・癒し】【発掘・育成】【交流・平和】

【大阪力・発信】

大阪力（ナニワの力）を、全国に、世界へと発信する。

大阪は、歴史的に文化の盛んなところであり、日本の文化の中心といっても過言でない地域である。大阪で花咲いた文化は、上方文化とも呼ばれ、多くの大衆に愛され続けている。文楽、歌舞伎などは大阪に咲いた芸術であり、世界に誇る文化である。これらは、いずれも音楽に結びついたものであり、音楽と切り離せないものである。

クラシック音楽の世界においても、大阪は、天才的作曲家である貴志康一を生んだ土地であり、戦後の混乱期において朝比奈隆が大阪の地で育てた大阪フィルハーモニー交響楽団や、その後生まれた大阪シンフォニカー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団など、大阪は、民間の力によって優れた楽団を生んできた。また、大阪の音楽ホールも、そのほとんどが民間によって設立されたものである。大阪は、クラシック音楽の分野においても、その文化の力は相当に強いものがあるといえる。

当楽団には、そのような文化の中心地である大阪において、府民の総意によって設立作られた楽団であることを自覚し、大阪を代表し大阪力、ナニワの力を世界に発信する役割を果たしていくという使命がある。実力のある有名な楽団がその都市の顔をとって世界に知られているように、大阪といえばセンチュリー交響楽団を連想するような世界に冠たるオーケストラと評価され、大阪力を世界に発信していくツールにならなければならない。

【感動・癒し】

府民の方々や、全国の、そして世界の人々に、感動と癒しを提供する。

すばらしい音楽は、これに接する人々に感動を与える。当楽団は、広く府民の方々や、全国の、そして世界の人々に対して、その演奏を通じ、感動を与えることを目指さなければならない。そのためには、日頃の研鑽を重ね音楽力を高めることによって、多くの人々に感動の音楽を提供することは、当楽団の大きな使命である。

音楽が人間の生活にとって極めて重要なものであることは、今や人類共通の認識だと言ってよい。物質的なものの価値だけが強調され、精神的な価値が忘れられがちになっている現代社会において、音楽の持つ重要な役割については、年々その評価が高まっている。

疾病の治療の手段としての音楽の持つ意味も評価されており、音楽療法士がそのための活動を進め、成果を上げつつある。音楽療法士を、国の認定する資格にしたいという動きもある。当楽団も、かつて、寝屋川の小学校で発生した殺傷事件の学童の心のケアのため、学校への出張演奏会を開催して一定の効果をあげた実績がある。

当楽団も、このような音楽の持つ役割を認識し、安らぎと癒しの音楽を多くの人々に提供し、現代社会に生きる人々に精神的な安らぎを与えるための活動を強化していく必要がある。

【発掘・育成】

子供たちへの音楽の提供によって、次世代の音楽文化を育み、音楽に優れた才能を持つ若手を発掘して、大阪から世界に誇る音楽家を送り出す。

幼児期の子供や小中学生、若い世代の人たちに音楽を提供し、子供たちの音楽的情熱を高め、次世代の音楽文化を育てていく必要がある。そのためには、素晴らしい音楽、とりわけ生の音楽に接する機会を与えることが必要である。そして、音楽に特別の才能を持つ若手を発掘して育成することによって、大阪から優れた音楽家を世界に送り出すことは、文化の地大阪に課せられた重要な課題である。

当楽団は、子供たちや若い世代の人たちに対する音楽教育に積極的に協力しこれを自ら実行するとともに、すぐれた音楽家を大阪から世に送り出すための活動をより強化していく必要がある。

【交流・平和】

音楽により世界の人々と交流し、音楽を通じて世界の平和に貢献する。

音楽は、世界共通の言語であり、言葉は通じなくとも音楽を通して、世界の人々と交流することができる。音楽により、言葉や人種が異なる人々が心の交流をすることは、地球規模で考え行動しなければならない現代において、極めて重要な課題である。

当楽団は、これまでも海外公演を行い、上海交響楽団と合同の演奏会を行うなど、世界規模での活動を行ってきたが、今後もこの活動を強化していく必要がある。

世界共通の言語である音楽は、これを通じて、世界の平和に貢献することができる。かつて、バレンボイムがイスラエルとアラブの合同の楽団員による演奏会を開催したことや、ニューヨークフィルが北朝鮮での演奏会を行って成功を収めたことは記憶に新しい。

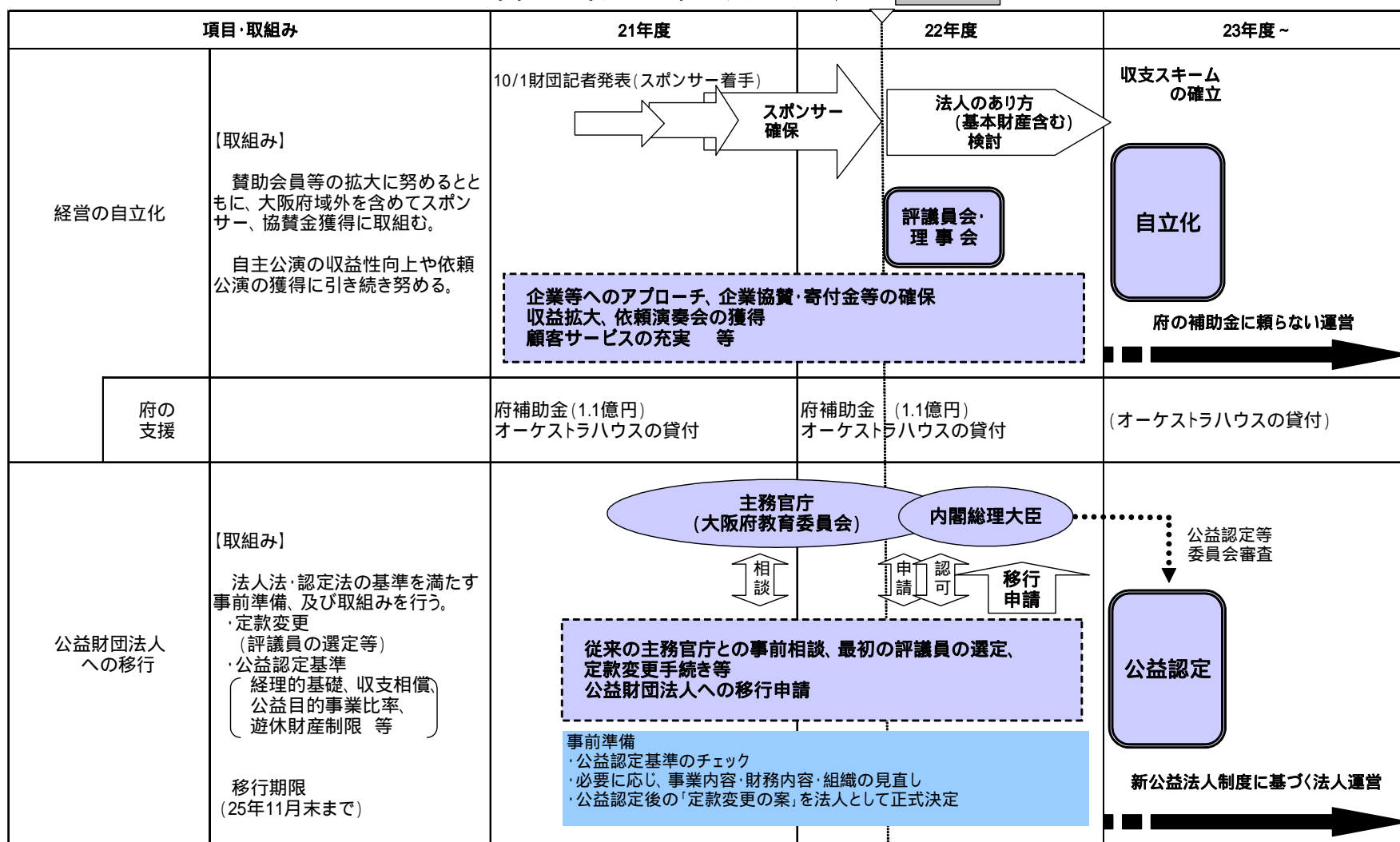
当楽団も、音楽を通じて世界の平和に貢献するための活動に、意欲的に取り組む姿勢が求められる。

以上

大阪センチュリー交響楽団の方向性

自立化工程表

自立化見極め



21.7 ← 特定公益増進法人の認定(2ヵ年) → 23.7

収 支 見 込

財団法人大阪府文化振興財団(千円)

[収入]

年 度	H19 (決算)	H20 (決算)	H21 (予算)	H22 (計画)	H23 (計画)	H24以降 (計画)
基本財産運用等収入	40,232	36,595	36,010	36,000	36,000	
協賛金・寄付金収入	4,600	16,413	33,000	33,000	400,000	以降、同様の収支 キームを想定
楽団事業収入	277,860	260,889	275,000	270,000	270,000	
半額鑑賞・野外音楽堂受託事業収入	24,117	23,576	-	-	-	
国補助金・民間支援収入	46,633	54,050	71,870	70,000	70,000	
雑収入	1,050	1,130	300	300	300	
府補助金収入	413,182	390,000	110,000	110,000	0	
合 計 (A)	807,674	782,653	526,180	519,300	776,300	

[支出]

年 度	H19 (決算)	H20 (決算)	H21 (予算)	H22 (計画)	H23 (計画)	H24以降 (計画)
交響楽団管理費(楽員人件費等)	341,390	326,048	297,000	297,000	300,000	以降、同様の収支 キームを想定
交響楽団活動推進費	242,579	245,402	253,800	254,000	300,000	
半額鑑賞・野外音楽堂受託事業費	21,983	22,022	-	-	-	
事務局人件費	89,727	103,028	90,200	90,000	90,000	
一般管理費	24,944	23,472	22,850	23,000	23,000	
音楽施設管理費	29,462	27,254	26,670	27,000	27,000	
合 計 (B)	750,085	747,226	690,520	691,000	740,000	

差 額 (C) 【C = A - B】	57,589	35,427	164,340	171,700	36,300	
------------------------	--------	--------	---------	---------	--------	--

特定事業積立資産取崩 (D)	-	-	120,000	180,439	-	
----------------	---	---	---------	---------	---	--

差 額 (E) 【E = C + D】	-	-	44,340	8,739	36,300	
------------------------	---	---	--------	-------	--------	--

(参考) 特定事業積立資産残額	-	300,439	180,439	0	0	
-----------------	---	---------	---------	---	---	--